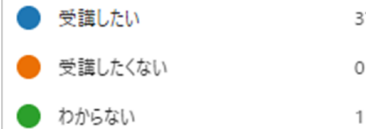


通訳案内士に対するアンケートについて

北海道在住の通訳案内士にアドベンチャートラベルのスルーガイドに関するアンケート実施

回答：73名中38名（言語内訳：英語37名、中国語1名）

ATスルーガイド研修等が実施された場合その研修を受講したいと思われますか。



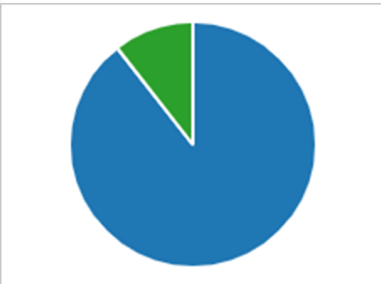
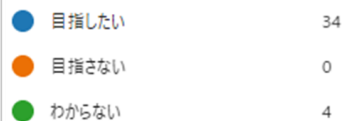
受講したいを選んだ理由

- ・自分自身（ガイド）のスキルアップに繋がりたい、ATの知識を深めたい
- ・ATに興味がある、必要なスキルが不足しているから
- ・ATWSでのアサインが決まっている
- ・アドベンチャートラベルのスルーガイドの業務を希望、スルーガイドのための技術を身につけたい。
- ・北海道観光振興機構主催の道南道央地区のモニターやリスクマネジメント講座は有意義でした。スルーガイドとしてのマネジメントやストーリーテリングを学びたいです。
- ・アドベンチャーツアーは、北海道の魅力をお客様にお伝えできる有力なコンテンツなので。
- ・アドベンチャートラベルは北海道の自然・文化・歴史を包括的にアピールできるので、積極的に、また長く関わっていきたくて思っているから。
- ・北海道は今後より注目される観光地になるのは間違いなく、講習を受けてぜひガイドとしての幅を広げて活躍したいです。
- ・AT視点のガイディング方法を自分なりに咀嚼して、まとめたい。一つでも多い情報や研修が点となり、ストーリー作成の際には線となって表すことができるから。ATに関わらず、自分がいる北海道のこのことを知ることで、日常生活にある自然などの知識が、自分自身の生活や心を豊かにしてくれると思います。ひいては、より良いATガイディングにつながるのではないでしょうか。
- ・安全管理は常に気を付けている事項ですが、ATのようなツアーが増えてくると、今後ますます重要になってくると思われるので、機会があれば受講したいと思います。

わからないを選んだ理由

実際にどれだけのオファーがあるか不明なのと、オファーがあっても日程的に受けられるかどうか分からないため

北海道アドベンチャートラベルのスルーガイドを目指そうと思われますか。



目指したいを選んだ理由

- ・北海道のよさをアピールする上で重要なポイントであると考えているため。
- ・これまでアドベンチャートラベルの実証ツアーにスルーガイドとして携わった経験があり、ツアーとしての魅力、地域への貢献、ガイドとしてのやりがいなど、たくさん魅力を感じた
- ・北海道はアドベンチャートラベルのポテンシャルが高く、北海道の自然や文化をぜひたくさんのインバウンドのお客様に知って欲しいから。
- ・仕事の幅を広げたい
- ・スポットより、全体の流れを共有したい
- ・今後はアドベンチャーーツリズムの他にも、様々な専門ガイドとのコラボの場面でできると思われ、それをスムーズに行うためのコツを会得し、ガイドのフィールドを拡げていきたい
- ・これからの北海道の魅力により広義のアドベンチャートラベルの中心になる可能性が高いため
- ・ツアー全体のストーリーの組み立てや伝え方、グループマネジメントについても詳しく学びたい。これらのスキルはATだけではなく、他のツアーでも必ず役に立ち、自分のスキルアップにつながると思う
- ・ただの観光ではなく体験した事をお客様だけでなくガイドの自分も活かしていきたい
- ・地元で開催されるアドベンチャートラベルイベントに関われることは、ガイドとしての成長のためにも絶好の機会であると考えます

わからないを選んだ理由

- ・気持ちとしては目指したい寄りです、得て不得手、向き不向きが何事にもあります。ATに関してもそうで、見極めもあるので、研修に参加して、自分自身の適正を知りたい
- ・私は全国通訳案内士、北海道限定通訳案内士、旅程管理者ですが、アウトドアガイドを実際に行うとなると、参加者の安全性をどう守るのか？負傷、病気のさいの責任の取り方など、心配事が多いので、仮にとっても使うかどうかわかりません。
- ・どれだけ必要があるか不明なため

技術能力基準（最低ライン）

分野	最低ライン	有識者（意見交換実施日）	付帯意見
自然	1年間100日×2年間 計200日	■ヒッコリーウィンド 安藤誠氏（7/22） 北海道アウトドア マスターガイド（自然）	本来であれば260日 ／年が妥当
ラフティング	1年間100日×2年間 計200日	■NAC 嶋守健一氏（7/24） 大手ガイド事業者 ガイド	
	1年間100日×2年間 計200日	■どんころ野外学校 新野和也氏（7/29） 北海道アウトドアガイド マスター（ラフ ティング）	※ラフティングと カヌー等複合的に 実施している事業 者は合計で200日が 限度
カヌー	1年間100日×2年間 計200日	■どんころ野外学校 新野和也氏（7/29） 北海道アウトドアガイド マスター（カ ヌー）	
	1年間30日×2年間 計60日 ※カヌーのみ	■然別湖ネイチャーセンター 島田知明氏 （8/4） 大手ガイド事業者 ガイド	※多種目を実施し ている。 ※冬季結氷する。
山岳 （夏山/冬山）	1年間100日×2年間 計200日	■北海道山岳ガイド協会 佐藤佑氏 事務局次長（7/24）	

技術能力基準（最低ライン）

分野	最低ライン	有識者（意見交換実施日）	付帯意見
トレイル ライディング	1年間100日×2年間 計200日	■まきば北海道 本田正則氏 (7/29)：北海道アウトドアマスターガイド (トレイルライディング)	日数について証明できるものが、個人の場合はないので、その点考慮必要
	1年間100日×2年間 計200日	■うらかわ優駿ビレッジ 太田 篤志氏 (7/24) 北海道内観光牧場 場長	馬の世話を入れれば 年中
オフピステ・ バックカント リースキー等	1年間60日×2年間 計120日	■北海道山岳ガイド協会 佐藤佑氏 事務局次長 (7/24)	
サイクリング	1年間100日×2年間 計200日	■知床サイクリングサポート 西原重雄氏 (8/7) JCTAガイド	
	1年間100日×2年間 計200日	■サイクリングフロンティア 石塚裕也氏(8/7) JCGAガイド	

技術能力基準（最低ライン）

分野	最低ライン	有識者（意見交換実施日）	付帯意見
スタンド アップ パドルボード (SUP)	1年間30日×2年間 計60日	■十勝ネイチャーセンター マネージャー 市川淳氏（7/27）	※多種目を実施
	1年間250日×2年間 500日	■Hokkaido Great Adventure 岸浩明氏 （7/24） 道内ガイド事業者代表／SIJ指導員	※SUP専業
	1年間50日×2年間 計100日	■とがちアドベンチャークラブ 代表 野村竜介氏（7/29） 道内ガイド事業者 代表 北海道アウトドアガイド資格ラフティングマ スター	※ラフティングを はじめ多種目を 実施
	1年間120日×2年間 計240日	■オーシャンデイズ 黒岩夕湖氏（7/30） 道内大手SUPガイド	

検討分類	実施回/日	参加者（敬称略）
WG1 分野拡大	第2回 2022/8/23	北海道山岳ガイド協会 佐藤 佑氏 利尻自然ガイドサービス 渡辺 敏哉氏 (株)サイクリング フロントア 石塚 裕也氏
	第2回 2022/8/26	日本サイクルリズム推進協会 松澤 憲司氏
WG2 スルー ガイド	第2回 2022/8/4	(株)北海道宝島旅行社 鈴木 宏一郎氏 黒松内観光協会 本間 崇文氏 M's English 馬上 千恵氏 FUN HOKKAIDO 岡田 吉弘氏
WG3 能力・ 資格価値向上	第2回 2022/7/20	北海道山岳ガイド協会 佐藤 佑氏 ウィルダネスロッジ「ヒッコリーウインド」安藤 誠氏 TREE LIFE & RESCUE 荒田 康仁氏 鶴雅リゾート(株)アドベンチャー事業部 高田 茂氏
WG4 国際資格等	第2回 2022/7/29	NPO法人大雪山自然学校 荒井 一洋氏 (一社)ウェルダネスメディカルアソシエイツ ジャパン 横堀 勇氏
	第2回 2022/8/9	(株)インアウトパウト 仙台・松島 西谷 雷佐氏 M's English 馬上 千恵氏
トライアル	第2回 2022/8/11 ～8/12	M's English 馬上 千恵氏（座学講師、実地評価者） （公社）北海道観光振興機構（座学講師） 黒松内町観光協会 本間 崇文氏(実地評価者) ほか、スルーガイド候補7名

WGの主な意見	事務局整理案
<p>1. 「新分野」の選定及び考え方について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 特段問題なし。 ・ 別途詳細な連携方法や条件については、各連携団体と内容を詰めていく必要がある。 ・ 北海道アウトドア資格を改めて受験するという点については、異論が出る可能性や、そもそも受験しないというガイドが出てくる可能性がある。 ・ JCTAについては、技術や安全性に課題が見られる。もし、技術・安全に係る実地研修を実施するのであれば、内容の確認は必要。 <p>2. 「新分野」のガイドにおける経験時間等客観的基準について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ それぞれの方にヒアリングしているため、説得感がある。特段問題なし ・ バックカントリーの120日というのもシーズンが短いことを考えると妥当。 ・ サイクリングについては、専業で行っている方がほばいないため、今後調整が必要な場合が出てくる可能性がある。 	<p>○連携する分野と民間資格については、下記の通り。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ オフピステ（サイドカントリー）・・・公益社団法人日本山岳ガイド協会（JMGA） ・ バックカントリー・・・公益社団法人日本山岳ガイド協会（JMGA） ・ サイクリング・・・一般社団法人日本サイクリングガイド協会（JCGA）、一般社団法人日本サイクリングツーリズム推進協会（JCTA） ・ SUP・・・一般社団法人日本SUP指導者協会（SIJ） <p>※サイクリングについては、オンロードとオフロードを分けず、「サイクリング」として扱う。</p> <p>※JCTAについては、技術・安全等に係る実地研修の内容を確認し、その開催を持って連携とする。</p> <p>※SIJについては、ガイド技術に課題が見られるため、別途北海道アウトドアガイド資格の専門分野「自然」「カヌー」「ラフティング」のいずれかの資格保持者を条件として認定。</p> <p>○北海道アウトドア資格の受験については必須とする。</p> <p>○ガイドに認定されるメリットが施策に反映されることが望まれる。</p>

WGの主な意見	事務局整理案
<p>1. スルーガイド要件：保有すべき資格、各分野の技術能力基準</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ガイド従事日数について、原案は2年間で150日としているが、裾野を広げるのであれば、50～100日程度にするべき。また、地方はお客様の人数が限定されているため、150日は厳しいと思う。 ・北海道アウトドア検定より上位資格（自然に関する国際資格や森林インストラクター）の保有者は認められないのか。 ・通訳案内士試験に実技はないが、旅程管理資格は実技（ツアー添乗業務）が含まれているためスルーガイドにとって重要な資格である。 ・添乗経験は重要。 ・組織に属さないフルランスのガイドは旅程管理主任者資格の取得方法がわからない。方法を提示またはサポートしてほしい。 ・知事認定である以上、語学レベルの指標は必要。 ・帰国子女などネイティブレベルの語学力を維持している方でTOEICを持っていない人もいる。ガイドラインを制定することは良い。 ・ATガイドフィールドトレーニングプログラム内容はとても良い。ただブラッシュアップする機会を与えることも重要。 ・バッジを取得することが他のガイドからの憧れになると良い。 ・プログラムに含まれる実技講習が一番大事。実技で知らないフィールドを知ることは学びに繋がる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○スルーガイドは北海道知事認定とする。 ○スルーガイドの定義、資質、要件等について整理 ○要件は以下6項目とする。 <ul style="list-style-type: none"> ・北海道アウトドア検定合格 ・旅程管理主任者資格（国内/総合） ・全国（北海道）通訳案内士またはCEFR B2相当以上 <ul style="list-style-type: none"> ※TOEIC Listing & Readingスコアのみの取扱いはしない ・安全管理 / 自然・歴史・文化 / 顧客・グループマネジメントを包括するプログラム「北海道ATガイドフィールドトレーニング」の受講 ・技術能力基準は、海外旅行添乗員、通訳案内士・観光協会等ガイドとともに業務従事日数を100日（直近2年間 ※救済措置あり） ・ホームページ上へのプロフィールの公表同意

WGの主な意見	事務局整理案
<p>2. スルーガイドの名称について</p> <ul style="list-style-type: none">・観光庁の資料を基に整理した内容に異議なし。・スルーなのかアクティビティガイドなのか分かりやすくして良い。・通じるか、通じないかはともかく、表記や表現を統一するのは良い。	<ul style="list-style-type: none">○観光庁公表資料「アドベンチャーツーリズムナレッジ集別冊 海外調査結果」をもとに、アクティビティガイドとスルーガイドの定義と用語を整理。○アクティビティガイド アドベンチャートラベルについて十分理解し、それぞれのアクティビティに対する高い技術及び専門性を併せ持ち、アドベンチャートラベラーからの要求に対応できるガイド○スルーガイド アドベンチャートラベルについての十分な理解と北海道（地域）に関する多様な情報を持ち、自身もツアーに参加しつつ、顧客管理を担い、ツアー参加者とアクティビティガイドを含めた地域関係者及旅行会社等との橋渡しを行うコーディネーター

WGの主な意見	事務局整理案
<p>1. アウトドアガイド能力向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ・技術能力基準については、日数で設定で問題なし。 ・客観的基準である技術能力基準を作りつつも、旅行会社や個人の顧客からの顧客推奨度を取り入れていく方向で問題ない。 ・技術能力基準の申請に当たっては、マスターガイドや各民間団体の技術員、旅行会社の認証ないしは承認があればよい。 ・技術能力基準については見直しが必要。 ・専門分野「自然」試験を全ガイドオプションまたは、必須で受けることも視野に入れる。 ・保険についての記載も入れるべき。 <p>2. アウトドアガイド資格価値の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現状、本編資料中の「北海道に対する期待（提言）」の内容は重要な項目である。 ・優先順位としては、「ガイドジャンボリーの開催」「ガイドにスポンサーが付きやすい工夫」「環境教育への寄与」（佐藤氏）、「ガイドジャンボリー」「公共施設入場料無償化」（荒田氏）、「ガイドジャンボリー」「DXの活用（ポータルサイトの開設）」（高田氏）、「全て重要」（安藤氏） 	<p>○各分野の権威・有識者等へのヒアリングを実施し、技術能力基準を設定。日数については、下記のとおり。</p> <p>※全て直近2年間のガイド従事日数合計</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然 200日 ・山岳（夏・冬） 200日 ・トレイルライディング 200日 ・カヌー 200日※ ・ラフティング 200日※ ・SUP 200日※ ・サイクリング 200日 ・オフピステ 120日 ・バックカントリー 120日 <p>※カヌー、ラフティング、SUPについては兼業で実施している場合、3種合計で200日とする。</p> <p>○技術能力基準の対象期間については、当面3年間は2018年1月～2019年12月を対象とすることを可とする。</p> <p>○道マスターガイド等（拡大分野については連携団体の指定する技術委員等）の推薦を要することとする。（マスターガイド等自身については自薦可）</p> <p>○自然ガイド資格については、今後、他分野にも取得を奨励。</p> <p>○ガイドに認定されるメリットが施策に反映されることが望まれる。</p>

WGの主な意見	事務局整理案
<p>1. 外国語の能力基準の設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1回取得した資格を自己申告ベースで申請できるのは良い。 ・ 自己申告制はリスクが伴うことを把握すべき。 ・ 旧来のTOEICはスピーキング力の判断材料がないため対象外で問題なし。 ・ 例えば、JTBの海外添乗員向けの定期テストみたいなものを実施するのはどうか。 ・ 実践の場で先輩ガイドから学ぶ仕組みが構築されるとさらに良い。 ・ ゴールの設定や目指すべき姿を明確にすると良い。 ・ 研修は集団ではなく少人数や個別で実施したほうが効果的。 ・ 合格することで勘違いさせないようにすることも重要。 <p>2. サステナビリティ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ GSTCの要素とLeave No Traceの要素を合体させたプログラム内容はとても良いが、公的な修了証が欲しい。 ・ 折衷案としてLeave No Traceのワークショッププログラムを包括したプログラムにして修了証が発行できないのか。 ・ 英語研修の中で、ツアーが始まる前のブリーフィングでLeave No Traceの原則の説明を組み込んでほしい。 ・ Leave No Traceが入っているのが良い。 ・ 知的財産権や生物多様性など、日本人が苦手としている分野が盛り込まれるとさらに良い。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ アクティビティガイドはCEFR B1以上とする。 ○ 旧来のTOEIC (Listing & Reading) の取扱いはしない。 <ul style="list-style-type: none"> ○ 「北海道サステナブル ガイディング トレーニングプログラム 2日間」 1日目座学：持続可能な観光の国際基準の考え方 2日目フィールドワーク：Leave No Trace 7原則、指導法の理解や実習等の実施 ○ Leave No Traceのワークショッププログラムを包括し修了証が発行できないか、事務局で調整。 ○ 具体的な教材やカリキュラムはGSTCとLeave No Traceとで調整。

WGの主な意見	事務局整理案
<p>3. ファーストエイド</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 目指すべきレベル、ゴールが分かりづらい。 ・ 必須、推奨の表現方を検討すべき。 ・ 表記のマーク、見た目も検討すべき。 ・ ファーストエイドは一年に1回、訓練や研修をして振り返りを実施しないと、実際に対応できないのではないか。 ・ 山岳であれば、得意なフィールドにおいて、どの地点で電波が届く、連絡が取れる等、各ガイドが持っている情報を共有できる仕組みがあると良い。 ・ スルーガイドとしてWAFaを取得して知識や意識が変わったので受講して良かったが、維持し続けるかどうかは分からない。 <p>4. 安全管理、自然・歴史・文化、顧客サービスとグループ管理</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ATガイドフィールドトレーニングはバッジ付与を考えるとならば英語で実施する方が良い。 ・ 評価者の選定が難しい。 ・ 評価者は事務局など公平な目線での評価も必要。 ・ 綿密な評価基準の打ち合わせが重要。 ・ 評価者が外国人役を演じるとなると、ガイドはやりづらい、パフォーマンスに影響すると思う。 ・ 講師のクオリティコントロールが重要。 	<ul style="list-style-type: none"> ○道アウトドアガイドの各分野におけるファーストエイドの推奨（目標）レベルはWAFa（AWFA）とする。必須（最低限）レベルは上級救命講習等とする。 ○新分野のうちスキー（バックカントリー）を除く分野は道アウトドアガイド各分野同等。スキー（バックカントリー）は推奨（目標）レベルはWFR、必須（最低限）レベルは上級救命講習等とする。 ○スルーガイドは、道アウトドアガイド各分野同等とする。 <ul style="list-style-type: none"> ○北海道ATガイドフィールドトレーニングの実施 <ul style="list-style-type: none"> 1日目座学：ATツアーにおける基礎知識およびATGSコア・コンピタンスの理解 2日目フィールドワーク：ATツアーの実践 ○2日間のプログラム事項者には受講修了証を発行 ○2日間のプログラム受講後、テスト受験希望者には理解度チェックを行い、合格基準を満たした方にバッジを付与

参加者の主な意見	事務局整理案
<p>1. トライアル参加者から</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他の方の通訳ガイドを受ける機会がないため、非常に有効。技術の向上につながる。 ・ATについて改めて学ぶことができたため、座学が非常に勉強になった。 ・1回のみではなく、継続的に実施した方が良い。 ・良い研修だと思う。 ・セーフティー関係をどのように考えるかが今後の課題 ・この他に2泊以上宿泊し、AT有識者（ネイティブ）によるエキスパートコースを実施しても良い。 <p>2. 講師（採点者）から</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自身以外の通訳のガイドを見るのは自身にとっても良い機会であった。 ・日本人だからこそ、日本語で理解することができ、参加者の英語のニュアンスの通訳の仕方について認識できた。今後はネイティブも採点者に入れていくと、その場で「伝わる英語」を伝えていくことが可能。 ・チェックシートについては、前回よりの絞られているため、チェックしやすい。最低限の基準であればこれでよいと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 今後のスルーガイド認定及び、バッジの付与については、下記の内容で実施。 ■目的 <ul style="list-style-type: none"> ・ATGSのうち「安全管理」「自然・歴史・文化」「顧客・グループ」に関する十分な訓練を受けていることを証明するための研修。 ・スルーガイドの必修項目とする。 ■対象：スルーガイドの申請予定者等 ■参加人数：8名～10名（想定） ■実地コース <ul style="list-style-type: none"> 北海道アウトドア活動振興推進計画における指標「商品数」に計上されるATコースの全部または一部。 ■講師 <ul style="list-style-type: none"> ・2名以上 ・ATコースにおけるスルーガイドとしての実務経験（国・道・北海道観光振興機構等のAT関連事業を含む）を有し、道が認めるガイド。 ■内容 <ul style="list-style-type: none"> ・1日目 <ol style="list-style-type: none"> ①ATツアー催行における基礎知識や役割分担 ②ATGSとスルーガイドの役割の確認 ③スルーガイドに求められるリスクマネジメント ④翌日のフィールドワークの下見 ・2日目 <ul style="list-style-type: none"> フィールド上でのスルーガイド役、顧客役、現地ガイド役のロールプレイング。参加者の希望に応じ、チェックシートを利用した合否判定を実施。